

テクノロジ導入へ 中間層人材、改革の鍵

介護 B i z

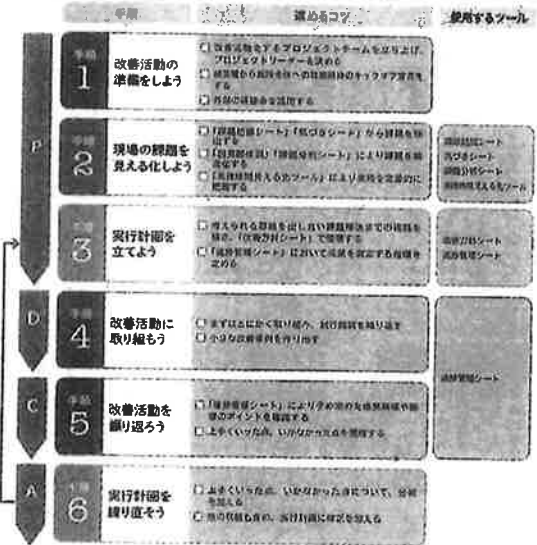
国立研究開発法人国立長寿医療研究センター(愛知県大府市)は2月7日、介護現場のテクノロジ導入・活用をテーマにしたWEBセミナーを開催。テクノロジ導入に向けポイント解説、実際に活用に取り組んだ事例について紹介した。

国立長寿医療研究センター

基調講演では介護事業。変化に対する抵抗感や、職場の中間層にデジタルを理解のある人材が少ないことなどが理由に挙げられる。DX化を成功させるにはマネジメントが上手く機能することが必須であり、中でもミドルリーダーが現場を引っ張ってあげることが重要であるとした。

実際の生産性向上の方法については、厚労省が作成した「介護サービス事業における生産性向上におけるガイドライン」に則って解説。生産性向上に向け、図の1〜6の手順で取り組むことがポイントと指摘。

鎌田社長は、現場で成功させるためには、「1フロア、1ユニットなど、マネジメントが効く範囲で、小さく始めること」とアドバイスした。次に実際に改善に取り組んだ事例として、3法人が発表。社会福祉法人陶都会のケアハ



▲生産性向上に向けたステップ。

出所：厚生労働省

ウスドリーム陶都は、「利用者状態像に応じたセンター&コール活用の見直し」の題で取り組みを紹介した。入居者の転倒を防止し、稼働率を維持したままスタッフの業務負担軽減を図ることを目的に、アンケートを通じて課題の見える化を行った。そこで、ナールへの負担感について、スコールが複数同時に鳴り、どれから対応するべきか迷うことが負担感につながっている実情が明らかになった。入居者のアセスメントとリスク評価などにより、対応の優先順位を整理した。そうした結果、アンケート調査でナールへの負担感について、25%が減ったと回答。また、42%のスタッフは対応が明確化したと回答した。発表者は、「活動を通じ、施設の課題をスタッフ間で共有でき、コミュニケーションが促進されたことが奏功したと思う」とコメントした。